

〇〇グリーンツーリズムの 可能性を探る

弘前大学人文社会科学部 WAIHA！

代表	田中 秀樺	磯野雄太郎	宇井 匠	植田真理子
	奥崎 美砂	葛西 優人	楠川 陸登	祐川 兼人
	足達 光	鈴木 結衣	鈴木 里咲	須藤 大成
	成田 滉	鳴海 璃久	太田 真帆	小田桐大空
	工藤優佳子	佐賀 雅英	鈴木沙耶香	立花さくら
	田中圭太郎	対馬 陸	中島 舞子	長濱 鮎
	成田 果歩	疋田あかり	宮脇 果歩	范中 麻央
	山田 大夢	山本 崇太	油布 直毅	佐久間雄太

1 はじめに

今日、人口減少や過疎化は日本各地で問題視されている。特に青森県は、人口減少とそれに伴う過疎化が顕著である。国勢調査の人口集計の結果（総務省統計局 住民基本台帳に基づく人口）によると、青森県の人口は 2018 年現在 1,308,707 人で前年に比べて 15,154 人減少しており、1985 年の 1,524,448 人をピークに減少傾向が続いている。また、青森県内では 28 の市町村が国から「過疎地域」に指定されている（青森県過疎地域自立促進方針 2015 年 8 月）。過疎地域とは一般的に、人口の著しい減少に伴って地域社会の活力が低下している地域のことを指している。

青森県弘前市相馬地区は 12 集落から構成されており、人口は 3,415 人、世帯数は 1,249 世帯（2017 年 弘前市住民基本台帳）である。相馬地区の農用地の利用は、耕地面積の 8 割以上を樹園地が占めており、りんごに特化していることが特徴である。りんごの稼ぎが多い相馬地区として知られる一方で、1969 年に国から「過疎地域」に指定されて以来、現在に至るまで人口減少が続いている。かつては独立した自治体（相馬地区）であったが、2006 年に弘前市と旧岩木町に合併された。その後も 10 年間で人口は約 1 割減少している。

相馬地区について調べるうちに、確かに人口減少に伴って、市町村合併や公共交通の縮小といった変化は見られるのだが、それをもって一概に地域の活力が低下していると言ってしまうことに対して疑問を抱くようになった。例えば、相馬地区では、弘前市との合併後も JA だけは合併せずに独自で運営を行っている。加えて、1960 年代から地域をあげて農道の整備を行い、近年はりんごのブランド化に着手して、海外への出荷も積極的に行っている。こうしたりんご農家の活況は、農林業センサスからもうかがえた。まず、後継者のいる農家が多い。りんご農家のうち 29%は同居後継者がおり、弘前市の平均である 27%を上回っている。（農林水産省 農林業センサス 2015 年）次に、農家当たりの樹園地面積が広い。平均で 1.9ha の農地を所有しており、これは弘前市の平均である 1.4ha を上回っている。さらに、農家当たりの農産物販売金額が大きいことだ。弘前市の平均が 760 万円であるのに対し、相馬地区は 1,760 万円と 2 倍以上である。（農林水産省 農林業センサス 2015 年）

このような、相馬地区の人々の暮らしを手掛かりにすることで、人口が減少する中でも地域の活力を維持するためのヒントを見出すことができるのではないだろうか。そこで本研究では、一般的に過疎地域に対して向けられる外側からの視点（過疎=活力低下）を見直し、そこに暮らす人々の視点から相馬地域の姿を捉え直す。そして、人々の生活実態に即して、人口が減っても豊かに暮らせる仕組みについて提案する。

そこで、私たちは、「りんごの村」である相馬地区の強みを生かし、相馬地区のりんごに更なる付加価値をつけるために、グリーンツーリズムに注目した。グリーンツーリズムとは、農山漁村地域において、自然・文化・人々との交流を楽しむ、滞在型の余暇活動のことである。以下では、グリーンツーリズムのことを GT と略す。

本研究は 2018 年 4 月から 2019 年 1 月下旬まで実施した。2018 年 4 月に青森県内の GT について調査を行った。すると、青森県では、県・市町村により GT 振興が図られているにも関わらず、目立った展開が見られないことが分かった。例えば、県内の農林漁業家民宿数（青森県 農林水産部 図説 農林水産業の動向 2017 年）は 2011 年から 2016 年の

約5年間で約65軒しか増加していない。また、県内でGTに取り組んでいる農業集落は、約5%（農林水産省 農林業センサス 2015年）しかない。更に、インバウンドは2011年から2015年の約5年間で148,000人（2015年 青森県観光入込客統計）にも伸びているが、GT動員に反映されていない。

そこで、この停滞の要因を探り、新たなGT活性化の方策を探る必要があると考え、6月から11月にかけて調査を行った。

2 統計データからみるGTの実態

(1) 以前は活発的にGTを行っていた相馬地区

表1から分かるように、相馬地区は過去にGTを行うことに積極的であったことが明らかになった。

表1 GTに関する相馬地区の歴史

年	GTに関しての相馬地区の歴史
1959	湯口・相馬村・紙漉沢による相馬村農協設立
1964	新・相馬村農協設立
1970	過疎地域指定（過疎特措法）
1972	桜井スキー場用地買収
1979	温泉掘削成功、保健センターと御所温泉竣工
1986	御所温泉新規掘削（現状は不明）
1988	天体観測施設完成
1989	ロマントピア開業
1991	桜井スキー場、ロマントピアスキー場と改称 演劇祭そうま（現状は不明）があおもり活性化大賞ロマン賞
1993	ロマントピアに温泉湧出
1994	農水省グリーンツーリズム推進事業指定 ロマントピアに森林科学館、野外ステージ竣工
1995	そうま型グリーンツーリズム構想策定→ゆとりある空間事業部（現状は不明） ロマントピアに白鳥座竣工 特産酒「森の宵・星の宵」販売開始（現状は不明）
1996	エビ等養殖施設竣工（→現状は不明） 弘南バス藍内線、ロマントピア線開通
1997	相馬中で紙漉き開始
2001	第6回グリーンツーリズムフィールドスタッフミーティング大会開催
2002	相馬バイパス開通
2004	弘前・岩木・相馬合併協議会発足

出典：『林檎の森：JA相馬村30周年誌』などから筆者作成

(2) 現在の相馬地区のGTの実態

現在の相馬地区ではどのくらいGTが行われているのか調べた。相馬地区と比較している平川市はGTが積極的に行われている地域である。表2より相馬地区では全農業集落数14のうち、GTを行なっている農家は0であることから、全くGTが行われていないことが明らかになった。また、平川市では51集落中44集落でGTが盛んに行われていることが分かった。

表2 GTを行っている集落数

	全農業集落数	GTを行っている農業集落数
相馬地区	14	0
平川市	51	44

出典：農林水産省 2015年農林業センサスより筆者作成

(3) 相馬地区と平川市の比較

初めに、相馬地区と平川市の果樹生産額を比較してみると、平川市より相馬地区のほうが1経営体当たりの生産額が245万円高く、相馬地区は平川市の約1.6倍の生産額であることが分かる。(表3)

次に、相馬地区と平川市尾上(おのえ)町、平賀町の農業生産額を比較すると尾上町、平賀町のりんごを含む果実の占める割合が約44%、53%であることが分かる。これに対して相馬地区の果実が農業生産額を占める割合は約91%であることが分かる。(表4) これら2つの表から相馬地区はりんごによって潤っているといえる。

相馬地区より果樹生産額の果実が占める割合が低い尾上町や平賀町ではGTが盛んに行われているため、りんごで潤っている相馬地区でもこのことを活かし、りんごを強みとしたGTを行い、地域の活性化や活力の維持が図れるのではないかと考えた。

しかし、実現するためにはGTを積極的に進める人の存在や中心となる施設が不可欠となっていくため、まずはそれらの問題を解決するための工夫を探していくことが必要になってくると考えた。

表3 相馬地区・平川市の農業生産額

	経営体数 (戸)	生産額(億円)	1経営対数当たりの生産額(万円)
相馬地区	454	30.6	674
平川市	1636	70.3	429

出典：2005年度 農林水産省 生産農業所得統計、市町村別生産農業所得統計累年統計

表4 相馬地区・平川市尾上町・平賀町の果樹生産額

	合計(億円)	果実(億円)	果実が占める割合(%)
相馬地区	33.5	30.6	91.3
尾上町	24.8	11	44.4
平賀町	73.5	39.5	53.7

出典：2005年 農林水産省 世界農林業センサス 平川市結果書、米・果樹の農家数及び作付面積

2005年度 農林水産省 生産農業所得統計、市町村別生産農業所得統計累年統計

3 相馬地区でGTはできないのか

(1) 先駆的にGTを行っていた相馬地区から見た鍵

そこで、以前は先駆的にGTを行っていた相馬地区で、なぜGTが行われなくなったのかを明らかにするため、6月に聞き取り調査を行い、相馬地区の農家がGTに対してどのような考えを持っているのかを調べた。その結果、GTに対して以下の5つのイメージを抱いていることが分かった。

- ・「朝から刺身を出さなきゃならないのか」など献立に気を遣う。
- ・宿泊場所を作ることに割く時間がなく、泊める場所がない。
- ・自分自身の父が身体を壊したことや孫が生まれたことで難しい。
- ・積極的にGTを進めていたロマントピア初代支配人が交代した。
- ・農作業も行っているので忙しい。人手不足で厳しい。

このように、相馬地区の人は農家丸抱えのイメージを抱いているためGTが浸透しないのではないかと考えた。

(2) 現在GTが盛んに行われている平川市

相馬地区でGTを浸透させるために必要なことは何かを考えるため、農家民泊型GTを行っている平川市にあるNPO法人広域連携津軽ほっとステイネットワーク（以下HSNと略す）で調査をした。

①NPO法人広域連携津軽ほっとステイネットワークの概要

HSNでは、2004年から青森県津軽地域で初めて「修学旅行農作業・農村生活体験ファームステイ」体験型修学旅行を受け入れ、2013年10月までに延べ95校、約14,000人を受け入れている。その他海外からの大人や学生の受け入れも行っている。下図は、HSNの受け入れ農家の分布図であり、平川市だけではなく、青森市の浪岡地区や黒石市、弘前市にも受け入れ農家がいる。HSNの受け入れ農家はほとんど民泊を行っており、修学旅行の受け入れでは1校に対して約30軒の農家に対応している。

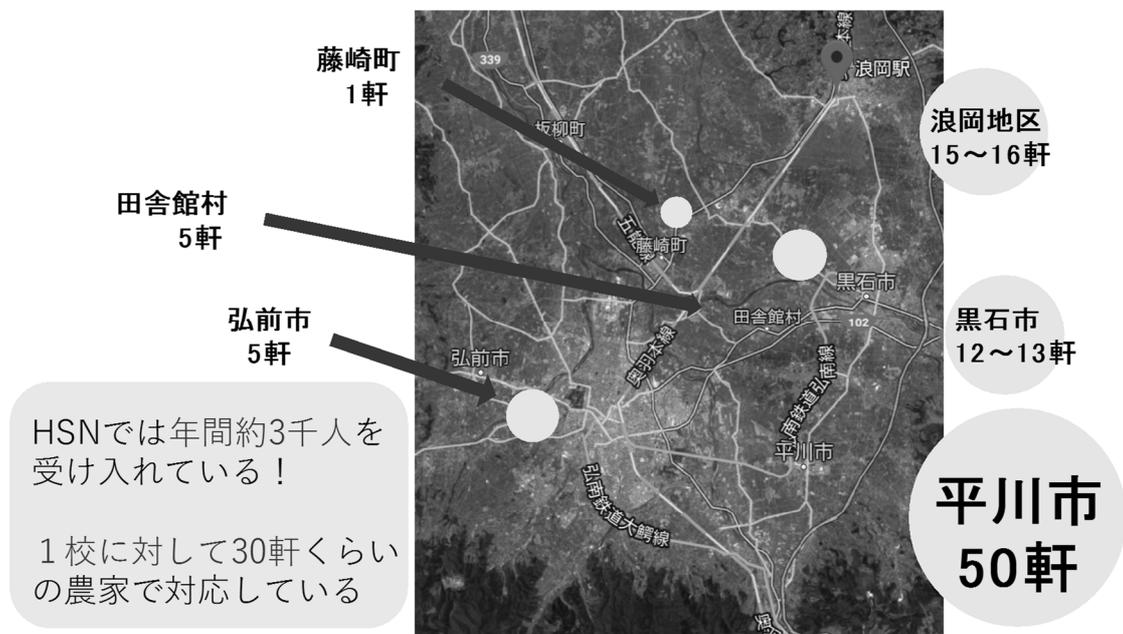


図1 ほっとステイネットワークの農家対象地区と件数

出典：調査結果より筆者作成

②農家に丸投げしないGT

また、HSNでは農家に丸投げしないGTを行っており、りんごの農作業だけではなく、農家蔵を案内し平川市について知ってもらう活動も行っている。平川市の尾上町には334棟の蔵があり、そのうちの94%が農家所有のもので、中には国の有形文化財に登録されているものもある。このような農業以外の地域資源を利用した取り組みを行なっていることが分かった。

(3) HSN と相馬地区の農家における考え方の違い

HSN での調査を通して、相馬地区で抱く GT のイメージと実際に HSN で行われている GT に違いがあることが明らかになった。

① 食事

【HSN】

・民泊の際、法律的な面から食の提供が難しいため、事前に献立を決めて材料の調達から調理までを宿泊者と一緒にやる。それが食の教育に繋がる。

【相馬地区】

- ・「遠くから来たお客さんが何を食べるのかを考えることが大変。」
- ・W 大学の学生を受け入れた際に、「朝から刺身か？」などと献立に気を遣う。
- ・「食事の準備とかするのは奥さんだから奥さんが大変だなあ。」

2 つを比較すると、体験者と協力する HSN と、気を遣いながら全てをやろうとしている相馬地区という違いが見受けられる。相馬地区では、「何年かに何回かなら GT を行ってもいい」という発言もあることから、食事面での奥さんの負担を減らすことが課題とみられる。

② 宿泊

【HSN】

・宿泊先は、農家の民家で、ありのままの文化・景観・食・農業を体験してもらうため、農業と GT との両立という考え方はない。

【相馬地区】

- ・宿泊施設を作ることや、お金をもらってご飯を食べさせたりすることに割く時間がなく、泊める場所もない。
- ・以前は GT を行っていたが、父が身体を壊したり、孫か生まれたりと家族関係の理由からでも、民泊をすることが難しくなっていた。

2 つを比較しても、GT 体験者を「お客さん」という概念で捉えている相馬地区は、GT を行う際の宿泊に対して、マイナスのイメージを持っていることが分かる。

③ 体験

【HSN】

- ・体験者には、基本しっかり働いてもらい、お客様扱いはしない。もし、いつものりんごの栽培作業よりも遅れが出ているといたら、それはお客様扱いをしているから。
- ・「農家蔵」という地域資源も生かしている。

【相馬地区】

- ・小・中学校での体験を行っていたが、いつの間にかやらなくなった。
- ・相馬中学校でも農作業体験を行っていたが、今は販売体験になっている。
- ・学童農園も今はなくなった。
- ・品質重視のため、素人には触れて欲しくない。
- ・(地域資源) 紙漉きを行いながら、農作業も行っているのに、忙しくて GT を行う暇がない。

2つを比較してみると、りんごの品質がGTによって落ちてしまうのではないかと、相馬地区の意見と、客扱いをせず積極的に体験者を巻き込むというHSNの意見のとおり、体験という観点ではHSNと相馬地区は全く逆の考え方を持っているということが分かる。また、HSNは無理なく地域資源を生かしているが、相馬地区は全てを両立させることが困難であるということが分かる。

④リーダー

【HSN】

・Sさんが、地域農業の危機を感じ、定年よりも6年早く退職し、仲間6人と連携し、ファームステイ事業を試みて動いている。

【相馬地区】

・初代ロマントピア支配人がGTに積極的だったが、支配人が交代し、その流れがなくなってしまう。

・どこの会合に行っても顔ぶれが同じになってしまった。

・相馬地区に5年くらいかけて、GTを進めようと準備をしていた人がいたが、亡くなってしまう。

2つを比較してみると、現在でもGTを積極的に牽引する人がいるHSNと、現在では積極的にGTに取り組む人がいなくなってしまう相馬地区と差は歴然である。

以上のことから、HSNで行われているGTをヒント、相馬地区でも新しいGTを行うことができるのではないかと考えた。

(4) 相馬地区に合うGTの形とは？

今まで、積極的にGTが行われているHSNとGTが行われていない相馬地区を比較してきたが、2つのヒントが見えてきた。1つ目のヒントは、これまでは農作業に忙しい農家がGTを担おうとしたため、宿泊面、食事面などで上手くいかなかったことである。2つ目は、HSNでは、農家蔵という他資源を活用し、活性化を図っているということである。

この2つのヒントから、相馬地区に既存している「星と森のロマントピア」「紙漉き」「オニテナガエビ」を利用できるのではないかと考えた。以下からは、その3つの調査結果を説明する。

4 相馬地区の潜在的な資源をどう活かしていくのか

(1) 星と森のロマントピアの概要

星と森のロマントピアは、相馬地区にある温泉宿泊施設である。星と森のロマントピアには、星の宿「白鳥座」(図2)といった宿泊施設があるのだが、そこは元々、「農業林業体験実習館」という名前で建てられた施設であり、GTの拠点として使われる予定であったということが調査で明らかになった。

しかし、施設の開設当初は温泉やプール、テニスコートなど、どちらかというところと一般客向けの設備が整っていたため、一般客の殺到によって、GTを行う動きがなくなってしまうのだ。また、星と森のロマントピアではGTの実現に向けて体験農園も作られたが、星と森のロマントピアから離れた場所に位置しているため、人が来ず、体験農園は使われ

なくなってしまったようだ。

これらの背景から、星と森のロマントピアでは過去に GT を行おうとしているということが分かった。しかし、一般客の殺到や体験農園がうまく機能しなかったことで、GT を実現させることはできなかったことも分かった。

私たちは、これらの背景も踏まえ、実際に星と森のロマントピアに行き、聞き取り調査と観察調査を行った。次節では、聞き取り調査と観察調査の結果を紹介する。



図 2 星の宿「白鳥座」(出典：筆者撮影)

(2) 星と森のロマントピアでの現地調査から

現地調査は 11 月 1 日に行った。星と森のロマントピアの施設の全体図は図 3 のようになっている。初めに、調査によって得られた星と森のロマントピアの施設の観察結果を紹介していく。

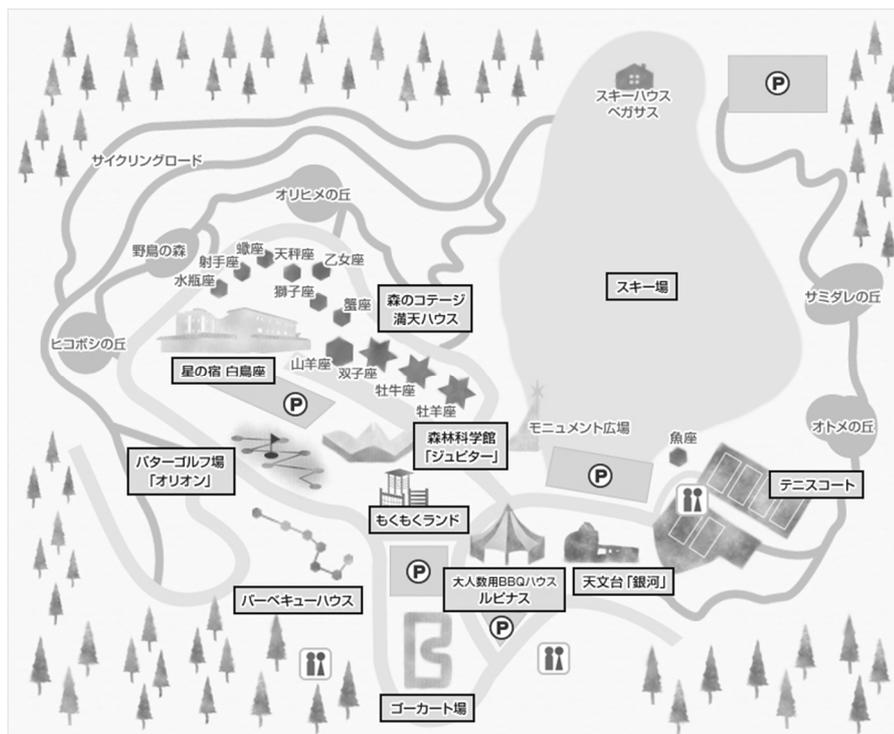


図 3 星と森のロマントピア施設全体図
(出典：星と森のロマントピア HP より)

<https://www.romantopia.net/outdoorfacilities.html>

①森林科学館「ジュピター」

施設の入館料は無料で、自由に出入りでき、トレーニングルームと相馬地区の森林や昆虫を展示する博物館が併設された施設である。博物館側には人は誰もおらず、電気が消されていた。博物館内の電気は、訪れた人が自ら点けるようになっていた。トレーニングルームの中には入ることができなかったが、室内を覗いてみると高齢者の方が1名と施設の方が2名いたのが確認できた。管理者と利用者がマンツーマンでトレーニングを行っていた。トレーニングルームにあったトレーニングマシンは新しくきれいなものであった。施設には入り口から入ってすぐに椅子やテーブルが置いてあり、施設利用者が休憩をすることができるスペースがあった。

②大人数用 BBQ ハウス「ルピナス」

調査に行った際は閉鎖されていたが、中は広く、約200人が集約可能である。施設の使用料は2,160円で、1つのテーブルで6人まで座ることができる。近くのキャンプ場でテントを張る場合、使用料は1,620円であった。「ルピナス」に併設されている炊事場は使われている痕跡がなく、手入れをされている感じではなかった。

③天文台「銀河」

施設の入館料は大人（高校生以上）が200円、子どもが100円であったが、弘前市民または星と森のロマンТПピアに宿泊した人は無料となっていた。開館時間は13時から22時となっており、最終入館時間は21時30分となっていた。施設の中にあつた、入館者名簿を見たところ、10月28日には、7団体計22人来ていたことが確認できた。また、大阪から6人で来ている団体もあつた。施設の最上階にある望遠鏡では、夜に星空を見ることが可能であり、昼には特殊なフィルターを使うことで太陽も見ることが可能である。

④星の宿「白鳥座」

星の宿「白鳥座」は4階建てとなっており、75人宿泊することが可能である。また、「白鳥座」の前には駐車場があつた。施設内には温水プール、温泉といった日帰りで利用が可能なものや、カラオケやゲームコーナーといった娯楽施設がある。ゲームコーナーも、「ジュピター」内の博物館と同様に電気が消されており、利用したい場合には、ホテルのフロントに声をかけ、電気をつけてもらわなければならないものとなっていた。日帰り入浴が可能な温泉の料金は、大人が360円、小学生が210円、またシルバー会員が210円となっていた。

(3) 星と森のロマンТПピアでの聞き取り調査から

星と森のロマンТПピア内の職員 Fさん

- ・夏の時期の星と森のロマンТПピアは、全体的に賑わっており、ゴーカートやテニスコートなどもあるため、それを目的に来る人がいると語っていた。Fさんが例に出していた話には、弘前大学のテニスサークルが合宿で利用するといったものがあつた。
- ・ゴーカートは気温の関係上、だいたい10月いっぱいまで終わり、春になったら再開すると語っていた。ゴーカートの手伝いを弘前大学で募集しているが、応募が来ないと語っていた。

- ・Fさんは、今の時期（調査日の11月前後）の昼頃の来訪者は、とても珍しいと語っていた。Fさんがそう語っていた通り、私たち以外の来訪者は誰もいなかった。
- ・Fさんは天文台「銀河」の管理人でもあり、天文台の最上階にある展望台には10人までしか入れないが、30～40人の団体客であっても上手く交代して中に入れることで対応することができるかと語っていた。
- ・天文台で星を見る場合、天候が悪いと夜に星を見ることができないため、せっかく観光客が来ても天候が悪くて見るできないケースがあると語っており、そのため、日帰りよりも宿泊して見るチャンスを増やしたほうが良いと語っていた。
- ・先ほどの観察で長い間使われていないと判断していた大人数用BBQハウス「ルピナス」の炊事場についても、星と森のロマントピアが賑わう夏には利用されていると語っていた。
- ・北海道の学校から、修学旅行で星と森のロマントピアに来たいという要望はあるが、修学旅行生全員を泊める規模の宿がなく、受け入れることが難しいと語っていた。函館近辺にある生徒数が30～40人といった小規模な学校については受け入れたことがあると語っていた。また、現在、宿泊施設の増築が行われていることから、修学旅行生の受け入れに関する宿泊規模の問題についても、解決につながっていくのではないかと語っていた。

（4）星と森のロマントピアで宿泊と食事を補完することは可能か

星と森のロマントピア内の宿泊施設、星の宿「白鳥座」には75人宿泊可能である。聞き取り調査でも語られていたように、星の宿「白鳥座」では宿泊可能な人数以上は受け入れられない。

しかし、現在、施設の増設が行われているため、より多くの宿泊客を受け入れられる可能性があることが明らかになった。このことによって、以前は断っていた規模の修学旅行生の受け入れも可能になってくるのではないかと考えた。

食事面では、星と森のロマントピアの星の宿「白鳥座」内には「シリウス」というレストランがあり、このレストランの席数は78席となっている。また、レストランでは農家の方から食材を取り寄せ、その食材を使った料理を提供することができるため、農家がGTの課題として挙げていた献立に気を遣う苦勞も補うことが可能である。これらのことから、私たちは星と森のロマントピアでは、食事の補完もできるのではないかと考えた。

前述したように、平川市ではりんごの農作業以外にも農家蔵の案内を行っており、農業以外のコンテンツもGTに組み込んでいるということが分かった。そこで私たちは、相馬地区でもGTと組み合わせられるコンテンツはないのか考えた。



図4 レストラン「シリウス」（出典：星と森のロマントピア公式HPより）

<https://www.romantopia.net/indoorfacilities/restaurant.html>

（５）誰でも気軽に、紙漉き体験

紙漉きとは紙、特に和紙を漉くことである。相馬地区には「紙漉沢集落」があり、ここでは名前の通り古い時代に紙をつくったと言われており、この紙を「高野紙」と呼んだ。現在は紙を漉いたところの遺物・遺跡は残っていないが、元禄時代に熊谷という人が紙漉沢で製紙の研究を行ったということもあり、その頃までは紙漉沢で紙を作っていたと言われている。

相馬地区紙漉沢には交流センター紙漉の里及び紙漉き隊が存在しており、その２つは1988年から1989年にかけて行われていた「ふるさと創生事業」の一環で誕生したものである。当時は村役場の教育委員会の人々が体験等を行っていたが、時間が取れないなどの理由から相馬地区に住んでいた子ども会の役員であったOさんが紙漉き隊を運営していくようになった。

紙漉き隊は農家の主婦が主体となって運営している。紙漉き隊のメンバーは全員がりんご農家で、うち２人は数ha以上の農地を所有している大農家である。その為、農繁期（収穫期など）の忙しい時期は紙漉き体験の依頼をされても日程調整を行うことや依頼を断ることもあるという。普段は農家メインの生活のため、基本は畑仕事を優先し、繁忙期以外の時期に紙漉き体験を行っている。7、8月は農家仕事が落ち着き多くの予約を受けるため、紙漉き体験の方が忙しくなっている。特に子どもたちが夏休みに入る最初の土日に、紙漉き体験を行う人が多くなるようだ。

紙漉き体験の宣伝について自発的なものは行っておらず、地元広報誌に載せているだけである。体験に訪れる人は観光客ではなく、新聞やテレビで見た人が大半であるという。紙漉き隊メンバーによると「本業である農家が忙しいから、宣伝して欲しいような、して欲しくないような」という発言があった。これより自分たちの本業も大事にしながら紙漉というもう１つの仕事も大事にしていきたいという様子も見受けられた。

（６）楽しく美味しくオニテナガエビ

相馬地区にはエビ釣り体験を行える場所も存在している。そこでは東南アジアのタイやマレーシアが原産のオニテナガエビが飼育されている。飼育しているのは「相馬えび等養殖組合 現組合長」のYさんである。「相馬えび等養殖組合」は1987年から行われた「むらおこし事業」の一環として結成された。結成にあたり施設をつくらなければならない、出資金を募り借金を抱えながらもどうにかエビを養殖するための「相馬エビ等養殖施設」をつくることができた。

発足当時、組合員は10人いたが現在はYさん1人である。亡くなってしまった方や高齢のためできないといった理由で辞めてしまった人もいる。それでもYさんがエビの養殖を続けている理由は、子どもたちが喜んでくれるからということであった。エビを養殖している施設では見学にきた子どもたちがエビだけでは飽きてしまうからという理由で、カブトムシや家庭用サイズのカニや金魚なども飼育しているそうだ。これも子どもたちに喜んでほしいからという理由から置いているそうだ。

そんなYさんのエビ釣り場は、基本土日祝日に営業されており、毎週200～300人ほどが体験に来るといって大変人気のものとなっている。ただし、この釣り堀に関しても宣伝や広報を自主的に行っておらず、弘前市（相馬地区）の人が広報に載せてくれたり、テレビ

が取材にきたりしたことで来場者が増えているらしい。

Yさんはエビの養殖の仕事だけでなく他の仕事も兼業している。それはりんご農家と大工である。図5がYさんの兼業年表である。Yさんは18歳の頃、最初は大工としてスタートした。22歳でひとり立ちし23歳に結婚した。Yさんの奥さんの実家がりんご畑であったため、りんご畑の方も手伝うこととなり、この時期からYさんは兼業することとなった。その後、1987年に「相馬えび等養殖生産組合」が結成され、9年後には「相馬エビ等養殖施設」が完成した。この時で大工、りんご農家、エビ養殖の3つの兼業をしている。そして2018年に入り、Yさん自身がエビの事業に専念したい、またエビの養殖が忙しくなってきたということで大工の仕事はやめることとした。また、りんご農家はYさんの長男が引き継いでおり、Yさんはエビ養殖の仕事を行いながら手伝いをしている。このような業務形態に移行するまでの道のりは決して平坦ではなかった。

Yさんはエビの事業を軌道にのせるまでに莫大な費用を負担し、借金を抱えることもあった。また、自身の入院や施設の電機トラブルの関係でこれまでにエビを2回全滅させてしまったり、組合員が離脱したりといった経験もあった。しかし、Yさんがエビ養殖を続けてこられたのは、エビや子どもたちを愛しているからである。そのため、様々な苦労があっても今までの長い期間、エビの養殖を行うことができたのだ。

このようなYさんのエビ養殖の事業を可能としたのは経営基盤である。元々行っていた大工、りんご農家という2つのしっかりとした収入源があったからこそ、新たにエビ始めたエビの事業が多少継続困難になったとしてもそれで終わりになることはなかったのだ。

このことは紙漉きにおいても同じことが言える。全員が紙漉きに専念するのではなく、りんご農家を営むことで自らの収入源を確保し、農家が忙しい時は仕事に専念するといった、無理せずに続けていこうとする姿勢が見られる。このような経営体制の魅力的なコンテンツが相馬地区には存在している。

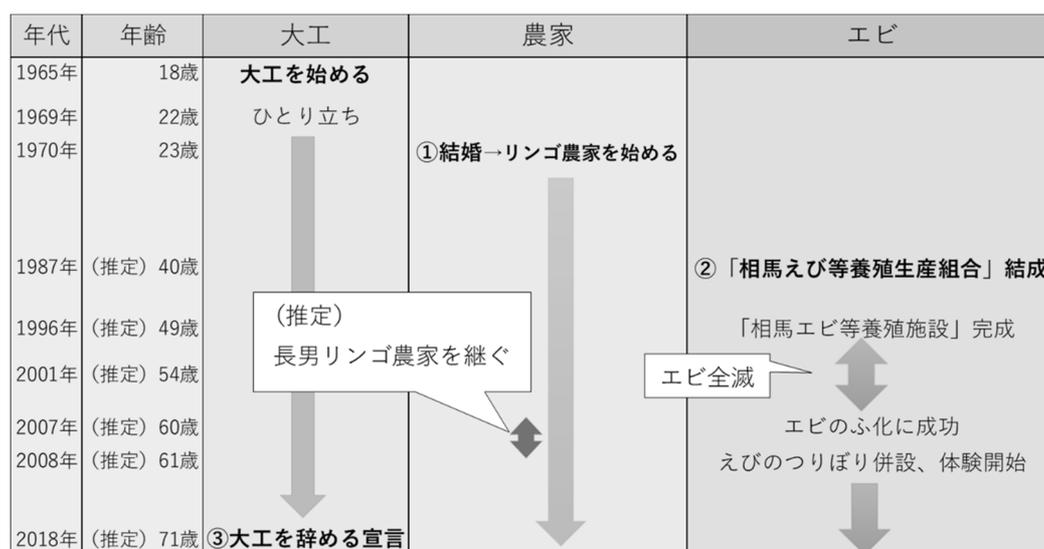


図5 Yさん兼業年表

出典：調査結果から筆者作成

5 相馬地区で可能な GT の提案

(1) 相馬型 GT の方向性

無理なく相馬地区でできる GT として、2つの方向性が見えてきた。1つ目はロマントピアを活用し、食事面と宿泊面を補完するという方向性だ。これにより、相馬地区の農家が「GTは農家丸抱え型だ」という概念がなくなり、農家の負担が少なくGTを行うことができる。2つ目は「紙漉き」「エビ」などの地域資源を生かし、それをGTに組み込むという方向性だ。今までは、GTと言えば農作業というイメージが根強く、農作業しか行われてこなかったが、他の資源も生かすことで相馬地区での新しいGTを提案できる。

この2つの方向性の実現することで、農家の負担が少ない持続可能なGTが可能になるのではないかと考える。しかし、ロマントピア、紙漉き、エビ、そして農家たちといった多様な主体をつないでいく仕組みが今後必要となってくるため、他のイベントを調査したところ、多様な仕組みで連携している「宵宮」と「相馬でJAZZを聴かNight」の経験が参考になると判明した。以下ではその「宵宮」と「相馬でJAZZを聴かNight」の調査結果について述べていく。

(2) 宵宮について

津軽地方では氏神様の祭前夜祭のことを宵宮と呼ぶ。こうした宵宮は紙漉沢地区でも開催されており、今回は7月12日に交流センター紙漉の里で行われた宵宮を調査した。調査は宵宮の運営方法、団体や人の関わり方に焦点を定め、当日には、参与観察と聞き取り調査を行った。

(3) 宵宮に関係する様々な団体

図6は宵宮当日の模式図である。この宵宮では、氏子集団をはじめとした様々な団体が携わっている。子ども会は輪投げ、婦人会はおでんとかき氷、青年団は焼きそばとお好み焼きの露店を出していた。また、交流センター紙漉の里の前ではカラオケ大会が行われており、老人会が横で日本舞踊を踊っている場面が見られる。紙漉沢の宵宮は、氏子集団だけで構成される場ではなく様々な団体に関わり合いながら構成される場になっているのである。

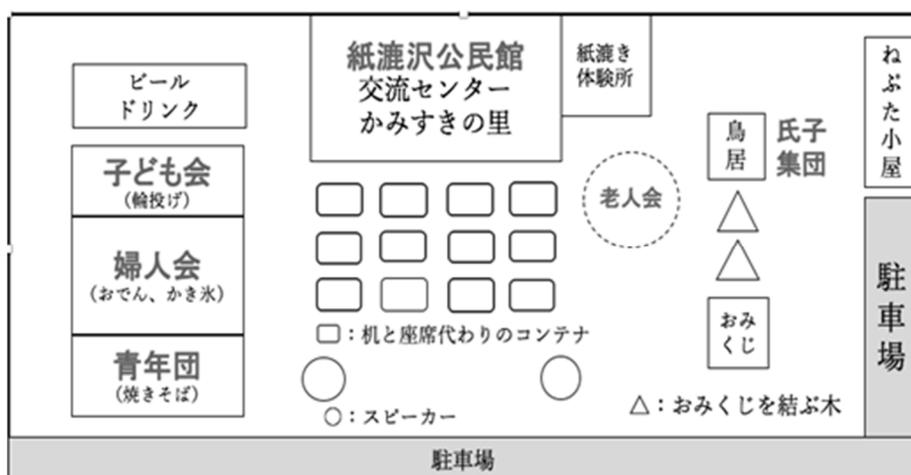


図6 宵宮当日の模式図

出典：調査結果より筆者作成

(4) 新たなイベント「相馬で JAZZ を聴か Night」の運営方法の変化

「相馬で JAZZ を聴か Night」は、2015 年から始まった紙漉沢集落の新しいイベントである。場所は相馬地区中央公民館長慶閣で開催している。第 1 回目は相馬地区の支所が中心となり運営していたが、第 2 回目以降は「相馬で夢おこし実行委員」が中心となり運営している。「相馬で夢おこし実行委員会」は、相馬地区の若者と地域おこし協力隊で構成されている。りんご農家だけでなく、保育士や会社員といった非農家も参加している。

(5) イベント・年中行事から新たな GT の担い手を探る

宵宮では、出店によって様々な運営団体が携わっていて宵宮が成立していることが分かった。また、JAZZ ナイトの運営団体「相馬で夢おこし実行委員会」の委員は、りんご農家と非農家で構成され、イベントを成功させていることが分かった。これらのイベントの成功を可能にしているのは、世代や職業、性別といった質が違う人たちで構成される組織であるため、様々な意見が飛び交い、柔軟に対応していけるのではないだろうか。

6 調査研究に参加しての感想

小田桐 大空

相馬地区はりんごの村というイメージがあったが、それだけではなく紙漉きといった地域の歴史を大切にしたり取り組みやオニテナガエビという新しいコンテンツもできており、相馬地区は少しずつでも前に進んでいるのではないかと感じた。私自身、実際にどちらも体験してみたが、それぞれ違った面白さがあり、これから相馬地区に人を呼べるコンテンツであると感じた。また、相馬地区の方々と意見交換をする機会があった。その際には紙漉きでりんごジュースのラベルづくりをしたら面白いのではないかと、またエビの釣り堀場からりんご畑への遠足をしたら盛り上がるのではないかとという意見などが相馬地区の方々から出された。相馬地区の方々からそのような意見も次々と出された為、今後何かしたら新しい事を始める事ができたら地域活性の一步になるのではないかと考える。

田中 奎太郎

相馬地区には GT を行なっていくために魅力的な資源が存在することを実感した。相馬地区で実現可能な独自の GT を行なっていけばいいのではないと思う。1 年間の調査を通して、相馬地区の新たな一面を発見することができた。

また、学生発の報告会で提案された農家の女性達の負担軽減には、手間のかからないレシピを普及すればよいというコメントに対して意見がある。相馬地区は、人手不足が深刻で、レシピがあったとしても GT を行う事は大変である。現在、問題となっていることは手間の重い、軽いではないと考えた。私たちは、相馬地区の農家丸抱えを脱するのが最優先であると考えたため、このような提案をした。

山本 崇太

相馬地区にはりんご農家が多いため、農業体験を行う GT がやりやすい地域なのではないかと考えていたが、実際に調査をしていく中で GT をするにあたって様々な問題がある

ことや以前 GT を進めていたが失敗をしたという背景が分かり、驚いた。また、今回の調査では相馬地区には強いリーダーが存在していなくても、農家やエビ釣りをしている Y さん、紙漉隊の人たちなど多様な人が集まって、コンテンツを組み合わせることによって魅力ある GT ができることを提案した。したがって今後は、様々な世代や職業の方々の具体的な連携方法を探っていく必要があると考えた。

対馬 陸

約 1 年間、相馬地区の GT の調査をしてみて、GT を行うためには、沢山のことを考えて行わなければならないのに加え、農作業も行わなければならないということで、農家だけで GT を行う事はほぼ不可能であるということが分かり、支え合いが必要だと感じた。今回の調査では、「強いリーダーがいなければできない」「GT は農家だけが行なわなければならない」といった固定概念を脱却し、農家丸抱え型でなく、農家以外の多様な人達と連携し無理なく行う事ができる GT を提案した。